

HIMALAYA

ヒマラヤ

No. 309



1997 AUGUST



日本ヒマラヤ協会
THE HIMALAYAN ASSOCIATION OF JAPAN — HAJ

H A J 30周年記念行事資金協力のお願い

H A Jは、1967年10月に創立され、緒先輩達の努力により本年、30周年を迎えることになりました。これを機会に記念の幾つかの行事を行うこととなりました。概要は下記のとおりであります。執行部としましては、これらの行事にかかる費用につきまして、極力外部資金の導入などを計って賄う予定であります。会員の皆様にも資金のご協力を仰ぎたくここにお願い申し上げます。

記

1. お願いする金額：一口 1万円

*機関誌「ヒマラヤ」誌上に氏名・口数を公表します。(匿名を希望される方は、その旨ご連絡下さい。)

2. 記念行事の概要：

1) 式典関係：

式典：1998年1月25日(日)(300名程度を予定)

午前：日本人ヒマラヤニストによるパネ

ルデスカッション

午後：ネパール、インド、パキスタン、中国から登山関係者を招請し、それぞれの国の登山環境の現状と問題点について講演をお願いする。

夜間：記念祝賀会

2) 出版関係：

- | | |
|---------------------|-------|
| 1. H A J 30年間の行動記録： | 500部 |
| 2. ヒマラヤ日本隊のまとめ： | 500部 |
| 3. ヒマラヤ日本隊遭難事故事例集： | 1000部 |
| 4. 機関誌「ヒマラヤ」総索引 | 200部 |

3) 野外関係：

それぞれのヒマラヤ諸国で行われる行事にあわせて臨時派遣。

4) 写真展：

会員からヒマラヤの「この一枚」を募集し、展示する。

表紙写真

ヒョンなことからクーラ・カンリ南面の旅が実現した。1997年4月25日、私はチベットの知人に誘われてクーラ・カンリ北面BCをジープで出発し、ロザジョン・チューを下り、プツォジジン・チューを溯り、サイを抜けてチュジマイの途中、3,980mの地点から雄大なクーラ・カンリの南面を見た。それはまさに、鷹が大きな羽根を広げたような姿であった。左からI峰(7,538m)、II峰(7,418m)、III峰(7,381m)。II峰とIII峰は未踏峰である。

山森 欣一

ヒマラヤ No.309

1. ブータン国境への旅

—クーラ・カンリ南面を見る—

山森 欣一

6. シアチェン氷河インド遠征隊 '96の記録

ハリシュ・カパディヤ

14. ヒマラヤ・ニュース〈地域ニュース・トピックス・ヒマラヤから・Books〉

17. 平成9年度 日本ヒマラヤ協会通常総会報告

24. 寸感・事務局日誌

ブータン国境への旅

—クーラ・カンリ南面を見る—

山森 欣一

■地図の真実を探る

最近ネパールの新しい地図が出来た。地図を見てあれこれと想像することは楽しい。岳人の登る以外のもう一つの喜びでもある。ネパールの新地図については、後日詳しい情報を持つ方に紹介していただく予定である。

中国登山では、地図を手に入れることが困難であったが、1990年には「中国山峰一覧図」、「青藏高原山峰図」、「南迦巴瓦峰登山図」が発行され、誰にも中国全体の山の概念がわかるようになった。また、93年には「中国登山指南」が刊行され、その中に収録された山々について15万分の1の地図が掲載されており、近隣の多くの山々が紹介された。95年には「雪域神山」というチベットの山の写真集も刊行され、この本には全く新しい山の地図が数点掲載された。その他にチョモランマ、チョゴリ、シシャパンマ、コングール&ムスターグ・アタの4枚の地図も発売されている。

このようにして、現在ではかなりの数の山々の地図を手に入れることが可能である。このような情勢から、これまで不明であったブータンと中国国境付近の山々も段々とベールを脱ぎつつあると同時に、国境付近にある山々の多くが六千メートル台の標高となった。

一方では、手に入れた地図の中でも、幾つかの地図では標高や地形が異なっている物も有り、新しい物だからといって直ぐに正しいと断定するのは怖い気持ちもある。結局どちらが真実なのかを現地に行って探る楽しみは残されることになる。

その一例が、チベット自治区措美（ツォメイ）県にあるチグ湖である。この付近の水系は西はブータンに流れてマナス川となり、東はスパンシリ川となりアッサムに流れ出て、共にブラマフトラ

川に注ぐのである。つまりこのチグ湖周辺が、マナス川とスパンシリ川の分水嶺を成しているらしいのである。そしてこの地域はまだまだ情報が少なく、それぞれの源流に聳えているだろう山々についても知られていない。

このチグ湖であるが、「青藏高原山峰図」では、流れ出る川が無いのであるが、ONCでは南に流れ出る川が有り、スパンシリ川に注ぐのである。どちらが真実なのであろうか。興味深々である。いずれにしても地図を見ながら、あれこれと想像することは楽しい。

■クーラ・カンリの南面の写真

クーラ・カンリ南面の写真は、1958年秋、中尾佐助によってメラカチュン・ラ(5,316m)からと、63年ガンサーによってボド・ラから撮影されている



る。二つの峠はいずれもブータンと中国の国境であり、二人はブータン側から峠に達して撮影した。

今回私がクーラ・カンリ南面を撮影したのは、中国側からである。先達の二人の撮影ポイントは5,000mを越えていたが、私の写真は4,000mからのものである。

■心弾む偵察行

ペルー人質事件が解決した翌日の4月24日夕刻、クーラ・カンリⅡ峰(7,418m)を北面から登山中のH A J/TMA合同登山隊B C(4,250m)に、一台のランドクルーザーが止まった。車から降りた客人は旧知の間柄であるCさんだった。早速、日本から持参した一升瓶をあけて歓待する。

聞けば、明日からクーラ・カンリの南面に入り、ブータン国境に聳え立ち、未踏峰としては世界最高峰であるガンカル・プンスム(7,570m)の入山路を調査するのだと云う。ついては、日帰りの予定だから私にも行かないか？とのお誘いである。

勿論私に異論がある訳は無い。有り難くこのお誘いに乗る事にした。タイミングのいいことに、肝心の登山活動は、C1で4月20日～21日と降った雪のため22日は停滞し、23日には全員がA B Cに下山して来ており、(中国側の3人はB Cまで降りて来た。)この日から2～3日休養の予定となっていた。明日一日私がB Cを離れてもクーラ・カンリ登山には支障がないのであった。

■県都ロザ(Lhozag)へ

標高4,250mのB Cに陽が当たり始めるのは、7時15分頃である。気温-7℃、偵察にはおあつらえ向きの雲一つ無い快晴である。それでも珍しく西風が吹いている。

8時にA B Cと交信。南面に行く事を伝える。10時、チベット側隊長とSさん、Gさんと私はランクルに乗ってB Cを出発。ロザジョン・チューの左岸に沿って下る。見渡す限り禿山であるが、その山と川のほんの少しの耕地では、飾り付けたヤクや馬を駆使して、畑作業の真っ只中である。道は当然舗装されていないが、右岸のカルジャン(7,221m)の北東に連なるゴウラ・カンリ(6,497m)から押し出された石原のために所々悪路となる。

▼ロザの洒落た建物



10時30分、広い谷に緑が散見する吉堆(ジスイ)で東に聳える打拉日(Tarha Ri 6,777m)連山を見る。残念ながら、後日この写真には最高峰が写っていない事が分かった。15分ほどで県都ロザに着くが、チェック・ポストで検問を受ける。隊長は早速関係部門へ出頭。標高3,900m。洒落た建物やトタン屋根の建物もある。食堂や商店がこれみよがしに音楽をかけ、電飾があるところなど正に県都である。

11時35分、ロザを出発して川底に降り、右岸に行く。両岸には大岩壁が連なり、水もB C付近とは変わって澄んで来た。下るに従って所々に見える猫の額ほどの畑には緑が見え、いかにも春を思わせる光景となる。1時間弱で左岸に渡る。

12時50分、本流と分かれて立派な橋を渡って、プツォジジン・チューの左岸に行く。分岐点の標高は3,280m、B Cから約1,000m下がったことになる。さすがに空気が濃い。

今度は、さらに清流となった川をドンドンと高度を上げて登って行く。B Cのあるザーリとは異

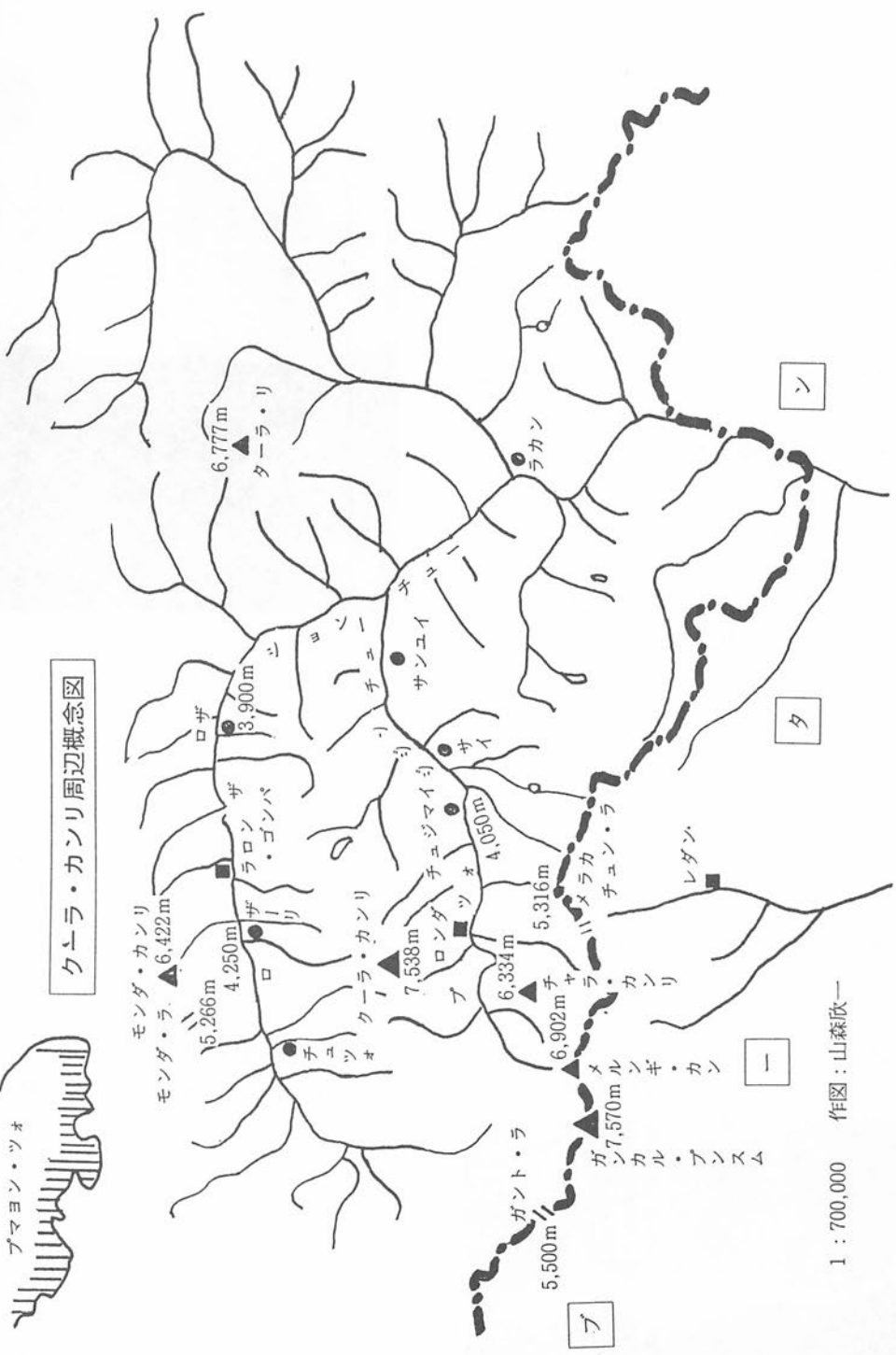


▲プツォジジン・チューの清流



ブマヨン・ツォ

クムラ・カンリ周辺概念図



1 : 700,000 作図 : 山森欣一

なり、この付近は大きな木もある。人も車もほとんど通らないが、たまたますれちがったトラックを通すためしばしの休憩をとる。

幾つかの支流を見送り、一時間ほど走ると富士山の頂上ほどの標高の川岸に温泉があり、ジープから見下ろすと何人かが入っていた。右岸に渡り、10分も行くと突然巨大な建物が目に飛び込んで来た。色(サイ)村に着いたのだ。3,830m。これは全く特異なゴンパだ。聞けばサンガクドウと云って、9階建てのゴンパだとのこと。帰りに見学することに先を急ぐ。

サイの村はずれから道は左岸になり、一気に高台へと駆け登った。視界が開けて前方に春山のようなどかな連山が姿を現した。そして雲も湧いて来た。雲のスピードが早いとクーラ・カンリが見えないのではないかと心配になる。前方の山々は、あまり高くはないが、ブータンとの国境の山に違いない。思わず胸が高鳴る。しかし、ジープは先を急ぐので停車も出来ない。

今度は一気に下り川底に降りた。右岸から支流が合流する。その合流点には、昔の名残の高い監視塔が我々を見下ろすように立っていた。それを見やり、カーブを曲がった途端、眼前に三つの巨峰が峻立していた。間違いなくそれはクーラ・カンリの南壁であった。間に合った。雲は今まさにI峰にかかろうとしていた。

今度は躊躇なくジープを止め、川底に走る。なんとと言う壁であろうか。思いもよらなかったことであるが、カメラのファインダーを覗いてシャッターを切っているうちに、メラメラと登攀意欲が沸き上がって来た。昔々とった杵柄からだろうか。



▲ブータン国境の山々(奥に小さくクーラ・カンリ)

▼クーラ・カンリ南面見ゆ(左I峰、右II峰)



ヒマラヤン・ブルーの空に、今、北から攻めている我々が登らなければならない、II峰の頂上リッジがくっきりと浮かび上がっている。そのリッジをはっきりと目に焼き付けた。心躍る瞬間であった。

感動の一時を過ぎて、さらに先を急ぐ。だが15分も走ると車の入れる終点である曲吉麦(チュジマイ・4,050m)に到着した。14時45分。もうここからクーラ・カンリは見えない。川は左前方にその姿を消しており、どうやらそちらが国境のようだ。

Sさんは早速村人を掴んでガンカル・プンスムの事を聞くが、全く要領を得ない。村人が云うには、この川を溯って行くと、メラカチュン・ラがあるとのことだ。ここでブータン側からの情報にもとづいて作られた地図にある名前が出て来るとは思いもしなかった。そうすると40年前に中尾佐助がブータン側から立った峠の丁度反対側に足を踏み入れた事になるのだろうか。地図を頼りに、Sさんと二人でガンカル・プンスムに到るアプローチを検討し、目鼻をつけた。

15時40分、屋根屋根に飾られた色とりどりのタルチョーが、折からの強風にはためく中、チュジマイを辞する。25分でサイに到着し、サンガクド

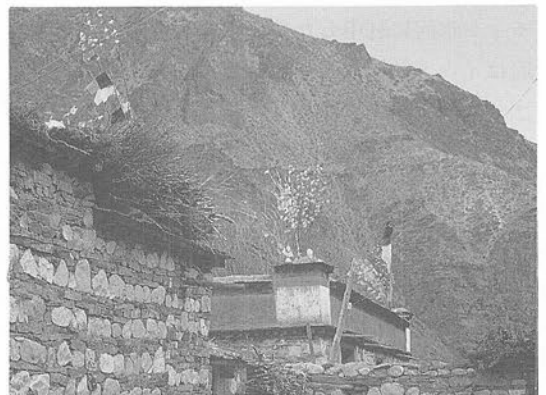
▼サイにある9層建てのサンガクドウ（左下はアップ写真）



ウを見学する。塔の中は、上に行くにしたがって段々と細くなり、天井も低くなって来た。各層の壁にはマンダラが描かれており、仏像が鎮座している。驚いた事に最上階の9階に登り着くと、案内にたってくれた若き僧侶が、窓から外に出してし

まった。聞くと、塔の周りに足場が作られて、ホールド用の鎖があって、ここを廻ると功德があるのだと云う。ここは一番、クーラ・カンリの隊長としては行かねばなるまい。廻って登山の安全と成功を祈るしかあるまい。一步外に出ると結構な高度感である。垂直だ。かって岩場を登っていた頃を思い出しながら、ホールドをしっかり掴み、時計回りで一周した。その間にも若僧侶はもう何周もしていた。修行の一環である。

16時50分、サイを出発。19時過ぎに強風が吹きまくっているロザに到着。食堂で腹ごしらえをしてBCに帰ったのは、カルジャン峰の姿がかるうじて見える21時丁度であった。



▲国境の村、チュジマイ

シアチェン氷河インド遠征隊 '96の記録

ハリシュ・カパディア

インド人登山家5名から成る遠征隊が、シアチェン氷河近辺に入域した。近年、紛争の舞台となっている地域だ。予定より遅れてテロン氷河（シアチェン氷河の支氷河）に入ったが、日程の半ば頃、軍の上層部から許可を取り消され、撤退を余儀なくされた。以下は詳細な報告である。

東部カラコルムのシアチェン氷河は、世界でも長い氷河の1つで、付近には幾つもの山々と支氷河を抱えている。源頭のインディラ・コルは、南アジアと中央アジアの境目にあたる。氷河から流れ出ているヌブラ川は、カルサルの辺りでシャイヨーク川と合流する。西側には西部カラコルム（現在はパキスタン領）、東側には中国との国境となるシャイヨーク盆地がある。インディラ・コルの北側はシャクスガム谷につながっている。シアチェン氷河はここ数年、インド、パキスタン間の紛争の影響で、登山者による入域は途絶えていた。

1970年代から1980年代初頭にかけて、パキスタン政府はこの氷河近辺の登山許可を幾つかの遠征隊に出した。これを機に、パキスタン側の主張が再び強化された。（そういう点から考えると、この地域で活動した登山家達は、登山家以外の役割も果たした事になる）。1984年、インド軍がシアチェン氷河に駐屯したのをきっかけに、インド政府はインド領域からの遠征を奨励する方針を打ち出した。インド人からなる隊、又はインドと外国のジョイント隊であれば、入域可能になった。我々ボンベイの登山家グループは、1996年の遠征許可を申請し、6ヶ月後、登山許可書を取得した。今回は全ての隊荷とポーター達を飛行機でレーまで送らなければならず（陸路が閉鎖されている為）、準備には多額の費用を要した。1996年6月5日、5名から成る我々の隊は、レーに到着した。

今回の目的は2つあった。1つは、チョン・ク

ムダンII峰（7004m）の初登頂である。シアチェン氷河の支氷河、南テロン氷河の上部に位置するピークだ。我々は、過去に行った遠征でこのピークを三方から観察しており、登頂の可能性があると考えていた。もう1つの目的は、シアチェン氷河を最後まで溯り、インディラ・コル（歴史的分割は別として、現時点ではインドの最北端）に到達するという事であった。シアチェン氷河のもう一方の側には、テラム・シェール氷河があり、最奥のコルは「イタリアン・コル」と呼ばれている。G・ダイネリ教授率いるイタリア隊（1929年）がその名付け親で、このコルを越えた記録を残している。

この29年隊のメンバーの中に、アルディート・デシオ教授がいる。彼は、カラコルム初期探検時代に活躍したイタリア人探検家の中で、唯一今も生きている人だ。K2初登頂を果たしたイタリア隊の隊長も勤めている。1897年生まれのもうすぐ百歳になろうとしているこの教授は、我々の「後援」を買って出てくれた。イタリア隊が、テラム・シェール氷河合流点に置いてきたという記念の石を、我々は探す事にした。

隊員の内3名は、東部カラコルム登山の経験者である。ブベシュ・アシャルとヴィネイ・ヘジデは登山界をリードするクライマーで、高所登山を何度か経験している。アシャルは、1991年、チョン・クムダン氷河周辺の5つのピークを登っており、ヘジデはガンゴトリ氷河の山々を、難し

(東部カラコルム概念図-I)



いルートから登っている。ヴィジャイ・コタリとハリシュ・カパディア（隊長）は、今回と同じエリアでの登山を2回、過去に共にしている。また、高所登山や探検も、この数年間何度か行っている。この4人に、学生のナワン・カパディアが加わった。その他、クマオンからは信頼できる5人のポーターを呼び寄せ、登山活動を強化する為に、レーで3人のシェルパを雇った。さらに、アプローチ輸送の為、15人のラダック人ポーターを雇った。

レーの空港で、リエゾン・オフィサーのキャプテン、ジャシュワン・ラクラ氏に迎えられた。軍の陸地測量部の将校で、デリーで英文学を学んでいたという。今回はボランティア参加である。我々は早速軍と接触をもち、国防省及びIMFが発行した隊の証明書を提出した。これらの書類は軍に対して何の意味も持たない、彼らは軍の中での書

類しか書類とみなさない、と事前に言われていたが、軍の書類は後から届くはずだ。とにかく我々には、ヌブラ谷へ入る許可が下りていた。隊長は



この地域の総指揮官と大隊長に面会した。

シアチェンでの障害

予定より2日遅れの6月12日、小村ワルシに到着。ここから先、ワルシ川（シアチェン氷河舌端から22km下方でヌブラ川に流れこんでいる）沿いのルートは自分達の手で開拓しなければならない。翌2日間は、ルート工作に費やした。地図上では、川幅があるように思えるが、実際は急峻なスラブに挟まれており、兩岸とも通過するのは不可能に見えた。

周辺を詳しく偵察し直し、全隊荷をこの川沿いに運び通すのは無理、という結論に達した。別のアプローチ・ルートとして、南テロン氷河が考えられたが、そこへ行くにはシアチェン氷河舌端にある軍のベースキャンプを通過する必要がある。通過許可証は持っていたし、そちらの方が確実に思えたので、ベースキャンプを通過することにした。それがより困難な状況を招くとは、その時は予想だにできなかった。

軍の「公式ルート」からの通過許可書は、まだ現地に届いていなかった。15日から17日にかけて、ベースキャンプの1km手前の砂地で足止め

を食らった。ようやく通過許可が届いたら今度は天候が悪化し、3日間停滞を強いられた。6月20日、ようやく出発の運びとなった。この時点で、既に10日の遅れが出ていた。

テロン氷河近辺

1985年、カパディアは印英合同隊の一員としてこの谷に入っている。前回同様、テロン氷河入口のギャツゴーにキャンプを設けた。翌日は、川を渡らなければならなかった。1985年の帰路、苦戦させられた所だ。伸びたボルトにつながれた古いザイルが、川の上に渡してあった（编者註：これは1988年リモI峰初登頂時のH A J / I M F隊が設置したもの）。アシャルが、慎重にこのロープを伝って渡り、6月22日、新しいロープを固定した。時間をかけて、メンバー全員と隊荷全てがチロリアン・トラバース方式で川向こうに渡った。右岸にキャンプを設営。ここから4km先がテロン氷河の入り口だった。我々は、南テロン氷河に入る為に途中から南に向きを変える必要があったので、左岸のモレーンにルートをとる事にした。

6月23日、気性の難しさで知られたラダック人ポーター達が、突然辞めると言い出し、我々隊員

(リモI峰の頂上より)



はモレーン帯の中間に取り残されてしまった。23、24の両日、我々は南テロン氷河の入口まで荷上げを行った。25日、湖が点在し、アイベックスのいる緑溢れる場所にキャンプを設営した。

時間の浪費は避け、27日までに前進キャンプを設けた。1985年のダラ・クシュクのキャンプより、3 km程下方に設営した。チョン・クムダンⅡ峰は近くに迫り、我々を手招きするかのようになり立っている。29日までにはその基部に到達し、1週間で登山活動を終わらせる予定だった。ところが、運の悪い事に天候が崩れ始め、29、30の2日間で大量の降雪に見舞われてしまった。食料、燃料のストックを保存する為、我々は一端テロン湖まで下らなければならなかった。7月1日、天気は回復したが、それまでに我々は別の計画を考え始めていた。この時点で14日もの日程の遅れが出ていた。ヘジデはボンベイ裁判所の弁護士をしており、そろそろタイムリミットが迫っていた。再度チョン・クムダンⅡ峰に向かうか、それともシアチェン氷河踏査に切り替えるか、全員で話合った。シアチェン氷河入域許可は今後また下りるとは限らず、インディラ・コルへ到達出来るチャンスはまたとないかもしれない。一方、テラム・シェー

ル氷河近辺の山の1つや2つは、いつでも登れる。ということで、我々はチョン・クムダンⅡ峰を諦め、シアチェン氷河にかける事にした。

シェルカール・チョルテン氷河

北テロン氷河と南テロン氷河の間にあるのが、シェルカール・チョルテン氷河である。1985年、スティープン・ヴェナブルスが単独で入り、アイスフォールを横切って、最奥のチョルテン(6,050 m)に登頂している。我々には3日間の余裕があったので、この付近のピークを1つか2つ登れると踏んでいた。7月2日、3日分の食料を携えて、氷河を登り始めた。午前11時までは順調だった。セラックの中の、魅力的なアイスフォールの間をジグザグに進んでいった。突然、サイドモレーンが崩壊している箇所に出くわした。中央部にエスケープルートは求められない。突破ルートを開拓することは可能だが、それには多くの時間を費やさなければならない。これで、3日間の速攻登山の計画は挫折してしまった。我々は引き返し、北テロン氷河との分岐点にテントを張った。

北テロン氷河

7月3日、カパディアは1985年の遠征時のベースキャンプ地に向かった。そばにはモレーン湖があるはずだった。このモレーン湖は1935年、P h. C. ヴィッセル教授がこの氷河を訪れた時の記録にも登場している。11年前の時は、氷河の上に6フィートもの高さの氷柱が林立し、それらを楽しく観賞しながら登った。ところが、今日の前に一つも無いではないか！氷河全体が平らに固く凍り、昔に比べて大分様変わりしてしまった。モレーンはその形が完全に変化し、黒っぽくなっている。昔のベースキャンプ地にたどり着くと、あるはずの湖が、消滅してしまっていた。少なくとも50年近く存在していたものが、たった10年の間に跡形もなくなってしまうとは。これらの変化は地球の温暖化を物語っているかもしれないし、或いは、人間の侵入が引き起こした事なのかもしれない。

そんな中で、リモ山群の景観だけは変わっていなかった。10年前と同様に、壮麗な二つの高峰が、氷河の上部に聳えていた。

昼までに下部キャンプをたたみ、川を横切る時再び滑車を使って、1日ばかりで「ロープ地帯」を離れた。ギャツゴーに設営。

ヘジデは、余分な隊荷を持たせたポーターと一緒にシアチェン氷河舌端を発った。彼らは新鮮な食べ物を手に入れてから引き返し、我々と軍のC1で再会する事になっていた。今回の遠征の中で、最も歴史的価値のある「シアチェン氷河行」を前に、全員意気揚々としていた。

シアチェン氷河の難局

7月5日午後。霧雨が降っていた。隊員は全員テントの中でくつろいでいた。突然、一人のポーターが、軍のベースキャンプから到着した。ヘジデからの手紙を持っていた。『ショッキングな事を知らせなければならなくなった。我々がテロン氷河に入った後、軍の誰かが我々の入域許可を取り消したようだ。氷河からの退去命令が出ているので、すぐに下りてきてほしい』怒りがこみ上げ息巻いたものの、為す術はなく、軍のベースキャンプまで下りた。そこでは、我々を引き下ろす為、数隊送り上げる話も出ていたという。退去命令は

上層部の将校から出たらしかった。事態を改善できるような権限をもった軍人はキャンプ内にはおらず、直接上層部とコンタクトを取ろうとしたが、無駄だった。我々は、レーに引き返さざるを得なかった。

レーに着いてからもう一度、デリーの軍上層部に働きかけてみたが、2日間音沙汰が無かった。バランス食を売り、レーで遠征隊を解散した。7月10日、レーを飛び立つ日の夕方、軍の関係者がシアチェンに今からでも戻る気はないか、と尋ねてきた。今から！その申し出は断り、我々は任務に就いている軍人ではない、ただの登山者であると説明した。多くの疑問、国家的信用の損失、そして多額の失費に直面させられた遠征だった。なによりも軍に振り回されたという感否めない。

7月13日までに、ボンベイに戻った。

シアチェン氷河の悲劇

インドはシアチェン氷河の領土権を主張しているが、パキスタンはそれに反論している。この両国間の紛争は今や世界から注目を浴びようになっている。1984年、インド軍が初めてこの氷河に足を踏み入れた年、日本隊がテロン氷河に聳えるリモI峰を目指してパキスタン側より入ったが、その隊は途中で中止を余儀なくされている（編者註：弘前大学隊。リモI峰の代替としてユクシン・ガルダン・サールの許可を与えられ、同峰第3登）。1985年、我々は同じピークを目指して、印英合同隊を組織した。紛争の最中だったので、軍隊からフル・サポートを受けた。

これまでパキスタンは、18以上の遠征隊にこの氷河での登山許可を出しており、さらにトレッカーにも入域を許可している。一方インドは、1隊にだけ（イギリスとインド軍の合同隊）上部氷河（テラム・シェールとその近辺）の入域許可を出している。この合同隊の隊長は世界的に有名なクライマー、ダグ・スコット氏（インド側はITBP長官、ソナム・パルゾール氏）だった。しかし、彼らは軍のベースキャンプに着いた段階で、テロン氷河への転身を軍から言い渡されていた（編者註：1989年。イギリス側はリモII峰(7,373m)に初登頂、インド側はIV峰(7,169m)の第2登を果

▼インドの支配権がしのびよるシアチェン氷河右岸の山々



たしたが、主目標のⅢ峰(7,232m)は英印双方の意見のくい違いから、取り付く機会を失った)。この隊には、批判すべき多くの点がある。今回、民間のインド人だけから成る我々の遠征隊は、途中でぶしつけに追い返されてしまった。印英合同隊から7年経った今でも、インド人登山家の我々ですら入域できないとは、実に嘆かわしい事である。

この紛争によって、多くの人命が失われ、様々な被害が出ている事を、軍は殆ど公表していない。もはや、彼らだけでこの紛争を解決する事は難しくなっている。インドの国家の安全を守る為には、軍力以外の方法、例えば、インドの登山家達がこのエリアで登山活動を行う等の方法の方が、きっと良い結果を生み出すだろう。より多くの民間人の遠征隊(インド内外を問わず)がこの山域で活動する事ができれば、この氷河での権利を強く主張することができるようになり、さらに東部カラコルム全体に於いても有利な立場に立てるようになるだろう。インド政府は既にこのような方針を打ち出しているのだが、軍がそれを阻んでいる、というのが現状である。

軍人だけでなく、一般人達も愛国者であり、色々な方法で国を支えている。経験豊かな我々民間登山隊は、国家を守るという面での良い効果を、生み出せるはずであった。我々は登山家として、この地域の厳しい状況、安全面の重要性、そしてインド兵の欠乏と彼らの苦労を理解している。しかし今の我々は、同じ言葉を話すインド人として、ただ国旗を掲げて応援する事ぐらいしかできない。

インドの隣接国では、ポーター・エリアでの登山許可を出すようになってきている。中国は今年、

インド・チベット国境警察隊に、チベット側からのエヴェレスト登山許可を出した。ITBPは、その名称の中に「チベット」という名を含んでおり、もともと中国軍と戦う為に組織された軍隊であることを思えば、大した進展である。また、論争の中心となっているアクサイ・チン道路付近では、日本人旅行客がパンゴン湖でキャンプをしているが、そこは一部インド領となっている。1993年には、フランス人スキーヤー達がインディラ・コル北面の基部に達し、ジャクスガム谷を訪れているが、その時リエゾン・オフィサーは同行していなかった。パキスタンは、シアチェン付近の登山や、紛争地帯へのパキスタン側からのトレッキングも許可している。1971年、紛争の真っ最中に作家のダークラ・マーフィはシャイヨークでトレッキングを行っている。これらの驚くべき話は皆事実であり、皆これらの現状に目を向けて、人工衛星時代における「安全」とは何かを、今一度考え直すべきであろう。

過去の何人かが経験したように、我々は多大な苦痛と犠牲を伴って、遠征から帰郷した。軍の最高部と民間人の権威には、陳情を行った。民主主義国家インドの最高の権威である国防省及びIMFから許可が出ていたにも関わらず、軍に撤退させられたという事は、今一度問われるべきものである。

我々は、この問題が「国家安全」という名目の下に押しやられる事なく、徹底的に議論される事を望んでいる。

環境について

ラダック地方全域及び東部カラコルムは、近年気候の変化が現れつつある。東部カラコルムは最早乾燥地帯ではなく、数インチの降雨も見られるようになった。1995年は大雨が降り、マナリ〜レー間の道路は地崩れの為通行止めとなってしまった。

シアチェン氷河の舌端は、過去11年の間に800mも後退しており、岩石がむき出しの状態で益々荒涼とした感じになっている。テロン氷河、とりわけ北テロン氷河は後退が早く、かつてあった氷河湖や氷塔は、この10年間で全て消え失せてしまった。サフィナ谷のアイスフォール(1985、我々は

そこを通過した)とシェルカール・チョルテン氷河はさらに崩壊が進み、様相が大分変わっていた。

シアチェン氷河の名は、シアズという薔薇科の花の名からとったものだが、この花は氷河舌端やヌブラ谷の至る所に咲いている。テロン谷の岩場などにも見受けられるが、背丈は高くなっている。テロン谷ではアイベックスの群に出会うこともある。メインの氷河ではアイベックスの姿は見かけない。

氷河上で生活している人々が生み出すゴミの量は、増加の一途をたどっている。それらの多くはクレバスの中に落とされたり、岩場や雪の上に山積みにされている。ゴミの中でも目を引くのは、ジュースの入っていたアルミ製の四角い箱で、これらは燃やしたり壊したりしにくいので、氷河のルート上に点々と残っている。シアチェン氷河の環境問題は、このゴミの処理も含めてもっと真剣に話し合われるべきである。

遠征概略

地域：東部カラコルムのシアチェン氷河、テロン氷河

目標：チョン・クムダンⅡ峰(7004m)を南テロン氷河よりアタックした。

メンバー：ハリシュ・カパディア(リーダー)

ブペシュ・アシャール

ヴィネイ・ヘジデ

ヴィジャイ・コタリ

ナワン・カパディア

期間：1996年6月2日～7月13日

後援：ボンベイ登山協会

結果：チョン・クムダン峰をワルシ川及び、南テロン氷河より試登。シェルカール・チョルテン氷河、北テロン氷河を踏査。

遠征途中にて、インド陸軍に許可を取り消され、中止せざるを得なくなった。

(訳出：菅原 愛里)

《シアチェン問題》

1947年8月、パキスタン、インドが相次いで独立したが、その際ジャム&カシミール(J&K)藩王国の帰属は未定のままであった。

同年10月、パキスタン側がカシミールに侵入し自由カシミール政府を樹立、これを危惧したJ&K藩主はインドに加入し、これをきっかけとして第一次印パ戦争が没発した。

1949年1月、カシミールにおける印パ停戦が成立し、同年7月、カラチ協定により停戦境界線が確立した。

その後1965年8月～9月、カシミールで再び交戦し、翌年1月のタシケント宣言により両軍は交戦前の境界線まで撤退した。

1971年12月4日～17日、印パは全面交戦したがこの戦いはインド側に有利に展開した。

1972年7月、シムラ協定により「J&Kにおいて1971年12月17日の停戦から生じた支配線は、双方の承認された立場を損なうことなく、双方によって尊重されるものとする。……後略」と定められた。

これに対するインド側の主張は「1949年のカラチ協定による停戦境界線は1971年12月交戦により破壊されており、もはや存在しない。そこで「停戦境界線(Case-fire-line:1949年確定)」という用語にかわり「支配線(Line of Control)」という用語を使い、これは従来の停戦境界線とは全く異なる新しい境界線であるとしている。

1985年には、インド領カラコルムとして、インディラ・コルを含む16座が諸外国の登山隊にオープンされた。テラム・カンリ('75年静岡大隊)やアブサラサス('76年大阪大隊)、シンギ・カンリ('76年東北大隊)、ゲントⅡ('78年関西学生山岳連盟OB会隊)、シア・カンリ('79年五大氷河隊)など、いずれもパキスタン側から登られた峰々がインド側の山としてオープンされたわけである。

但し、オープンされたといっても、このエリアが従来通り厳しいコントロール・エリアであることには変わりなく、入域に際しては、幾つかの条件が付与されている。



東京新聞の本

山の情報誌 岳人



毎月15日発売(日・祝日除く) 定価670円

■本誌の年間購読ご案内

本誌の購読は、全国の書店、東京新聞販売店、中日新聞販売店、北陸中日新聞販売店で承ります。

直接購読ご希望の方は、とじ込みの振替用紙に「岳人何月号」からお書きのうえ、送り先郵便番号、住所、氏名を明記して、ご送金ください。

郵送料は通常号116円、特大号124円です。年間購読料は8,480円で送料は当社負担です。お求めの本誌に乱丁、落丁がありましたらお取り替えいたします。

97年	第1特集	特別企画
★1月号	日本の雪山大作戦	南米インカ・トレイルに行く
2月号	富士見十三州の山	春のフンザとバルトロ氷河
★3月号	山スキー大滑降	ネパールの夢のトレッキング
4月号	アルプスの雪稜	初夏のロッキー特選コース
★5月号	花と森の山旅	中部の山岳会と奥美濃の山
★6月号	私の花の名山	創刊50年 世界のアルピニストたち
★7月号	今から間に合う海外の山	仙台のクラブ、東北の沢に行く
8月号	みちのくの山と沢	屋久島の緑深い峰々と人
9月号	修験の山は名山	山の達人と訪ねる秋の北海道
★10月号	紅葉の山、尾瀬と南会津	撮影クラブと秋の大峰山脈へ
11月号	晩秋、湯けむり紀行	フリークライミング天国・岡山
12月号	身を守る雪山技術	冬の奥秩父に生きる山人たち

(★は 特大号となります)

東京新聞出版局(中日新聞) 〒108 東京都港区港南2-3-13 ☎(03)3740-2674
 東京本社 書店で発売中。中日新聞販売店でも取りつぎます。

地域ニュース

《ネパール》

韓国隊ダウラギリ I に登頂

4月27日、ダウラギリ I 峰 (8,167m) を目指していた韓国隊が、北東稜から登頂した。登頂したのはワン・ヨン・ハン、フン・サン・キム、ヨン・セョク・パークの3隊員とシェルパのカジ・シェルパの計4人。

スコットランド隊隊長BCで死亡

4月23日朝、エヴェレストBCのテント内でスコットランド隊の隊長マルコルム・ダフ (44) が死亡しているのがモーニング・ティーを運んで行ったシェルパによって発見された。口腔内に嘔吐物が詰まっており、窒息死したと思われる。

カルロス出身のマルコルム・ダフはプロのクライマーであり、過去にシシャパンマ、チョー・オユー、エヴェレストに登っている。

難波さんの遺骨 1年ぶりの帰国

昨年5月、日本人女性として2人目のエヴェレスト登頂に成功後、下山途中に遭難死した難波康子さん (当時47) の遺骨が、夫の賢一さんに抱れて1年ぶりに帰国した。

賢一さんによると、康子さんとともに死亡したロブ・ホール氏の仲間のBCに滞在していたニュージーランド隊が5月、慰霊のためBCを訪れた賢一さんに遺体収容のためにシェルパを使うよう申し出てくれたという。

6人のシェルパらは19日に遺体を収容、21日には麓に到着し、現地の風習に従いラマ僧によって葬儀をあげた。 (6月2日朝日新聞)

《インド》

エアインディア、B747-400を導入

エアインディアでは、6月4日から東京～インド路線にボーイングB747-400を導入すること

になった。同機は、ファーストクラス16席、エグゼクティブクラス42席それにエコノミークラスを359席備え、高馬力・低騒音のエンジンを装備していると云う。更に、機内からクレジットカードを利用して世界中のどこへでも長距離電話をかけられる。

《パキスタン》

静岡隊ブロード・ピークで遭難

ブロード・ピーク (8,051m) の登頂を目指していた静岡市山岳連盟隊 (松永義夫隊長ら14人) からの連絡によると、6月16日午後1時15分同峰の標高約7,000m付近で幅約200mの表層雪崩に続き、幅約400m、長さ200m、厚さ1m以上の大規模な雪崩が発生し、同隊の横田川福造さん (47) と米国のジェフリー・バブさん (25) と鈴木達夫さんの3人が巻き込まれ、鈴木さんは自力脱出したものの、横田川ら2人は行方不明になった。

捜索は悪天候のため17日に一担打ち切られたが18日には、日本山岳会東海支部が派遣している、K2登山隊 (田辺治隊長ら9人) も捜索に加わり、同日6時20分ごろ2人の遺体を発見した。

(朝日新聞、スポーツニッポン)

なお、バルトロ三座 (K2を除く) を舞台に、それぞれが二座を登る計画の群馬岳連の3隊 (総勢21名) は、6月17日BCを建設した。

また、昨年ウルタルII (7,388m) の初登頂に成功した松岡清司さん (25) は墓参を終えてレディース・フィンガーの登山中6月26日BC～C1間で下山中、雪崩に遭遇して行方不明となった。

トピックス

平成9年度 理事会報告

日時 平成9年5月31日 (土)

10時30分～12時15分

会場 HAJ事務所

出席者 柴田金之助顧問、理事：稲田定重、山森欣一、寺沢玲子、中川裕、大内倫文、古関正雄 (以上本人出席6名)、八木原園

明、尾形好雄、野沢井歩、植松秀之、八嶋寛、名塚秀二、酒井國光、田辺治、林雅樹、名越実（以上委任10名）、中岡久監事。理事数17名中、16名出席。定足数は12名なので成立。

議事

稲田理事長が議長となって以下の議案について審議した。

第一号議案 平成8年度事業報告及び収支決算報告について（承認）

第二号議案 平成9年度事業計画及び収支予算について（承認）

第三号議案 会員の入会と除名について（承認）

その他：30周年記念行事の進捗状況について、山森専務理事から報告があり、会場等について承認した。また、柴田顧問からの依頼事項があったが各理事から本会になじまないとの、意見がほとんどであったため受けないことで、顧問には了承していただいた。

ヒマラヤから

K2便り

アッサラーム・アレイコム!!

こちらは今、日本山岳会東海支部K2登山隊の隊長として、パキスタンの首都イスラマバードにきています。連日45℃の灼熱地獄の中、さまざまなトラブルに悩まされながら準備を進めてきました。ようやく明日、登山の出発点となるスカルドの町へ移動できそうです。長年の夢であったK2の西稜から未踏の西壁を登り、ぜひK2に登頂したいと思います。

5月26日 イスラマバードにて 田辺 治

バルトロ三山便り

アッサラーム・レイコム

皆様いかがお過ごしでしょうか？

なぜか日本を出て1ヶ月、やっとバルトロの入口スカルドに着きました。今回ネパールでひどいゲリに悩まされましたが、又、スカルドで大当り。苦しい登山になりそうです。（クーラ・カンリII

は残念でした。）

隊員20人、シェルパ12人、L/O3人、パキスタンコック2人……etcで隊荷もブロードBC行き、ガッシャーBC行きと複雑で、本当に訳の解からない感じです。

しかし、メンバー、シェルパ、L/O、コックと皆今の所うまくやっています。パキは今年は涼しいらしく、今度の登山にどう影響するのかインジャラ……それでは皆様お元気で過ごし下さい。早く日本のつめたいビールがのみたい。エダ豆をつまみに……。 群馬岳連 野沢井

Books

カラコルム氷河紀行（写真集&詩集）

井上重治著

著者は、1992年秋から96年夏にかけて都合6回カラコルムを訪れ、チャラクサ、ヒナルチェ、プアルタル、パスーなどの氷河を歩き、氷河・動物・草花などの観察を行い、写真を撮った。これらの体験を文章にして普通はおしまいであるが、著者はさらに詩を詠んだ。

素人離れた写真からは、大自然の息吹がヒタヒタと伝わって来るし、添えられた詩がさらに臨場感を盛り上げて呉れる。書棚を飾りたい一冊。

A4判 ハードカバー 96ページ

ほとんどカラー 山と溪谷社刊 3800円

烈風の頂きに立ちて

札幌山岳連盟が、1993年と94年の二度にわたり、冬のランタン・リルン南東稜に挑んだ記録。94年に登頂成功。各係りの記録を中心に万遍なくまとめられている。最近多くなったと云われる現地で充填するEPIボンベの実例も紹介されている。

登頂日は良い天候であったらしいので、頂上からのパノラマ写真があれば価値が高まったに違いない。また、概念図などに使用されている標高に間違いや不統一が見受けられるのも惜まれる。

B5判 149ページ カラー8ページ

〒069 江別市野幌若葉町26-10 江崎幸一方

砂塵の彼方へ

労山所属のメンバーがコンロン山脈の未踏峰に7人全員で初登頂した記録。山は、ホータンの南西にあるハーン・ヤイリク(6,744m)。ガイドにルートワークと荷上げを任せて、なにがなんでも八千メートルの頂を踏みたいと、頑張る人達が増えているが、一方では、未知の地域や未知の山を見つけて楽しい山登りを志向する人達もいる。この登山隊はまさしく後者の代表であろう。六千メートル台の未踏峰は無数にある。手抜きや慣れに注意をすれば、短期間で充分楽しめる舞台があることを知る事ができる。周辺の山々の紹介があれば、このような志向を持つ人達の参考になっただろう。

B 5判 102ページ

〒678 相生市那波13-27-601 山岡人志方

未踏の白き頂を目指して

中津川勤労者山岳会が、1995年ニエンチェンタラIV(7,046m)を初登頂した記録。中国での登山は初めてということで、苦労した点が多く記述されている。また、隊員の様々な体験が報告されている。メンバーが多いということは、それだけ視点も変わるという意味では参考になる部分も多い。しかし、中には「高所登山はシェルパなしではありえないのである」などという外れの記述も載っている。「ヒマラヤ登山に係る飲料水消毒の試み」というユニークな報告もあるが、これほどの大冊にテイクイン、テイクアウトの報告がまとめられていないのは惜まれる。

A 4判 164ページ カラー11ページ

〒508 中津川市西宮町2-13 会事務所

STE I '96

滋賀県高体連登山部が1996年に派遣した、中国、チベットのツェンラII(6,323m)の報告書。ツェンラは、ピラミダルな山容のI峰(6,495m)と、半円状のII峰がある。この両峰は、1987年にチベット登山協会と合同登山した本会のラブチェ・カン隊によってその報告書と「ヒマラヤ232号・91/3」表紙で紹介されている。今回の登山隊の当初の目

的は、I峰であったが、岩壁に阻まれてII峰に進んで初登頂した。高校の先生達の集まりであるから、それぞれの分野について手際よくまとめられている。中には「グルカ戦争時における清朝軍の進行路について」という項目が、調査隊員によって報告されている。BC入りした隊荷が3トン近いと報告されているが、テイクイン、テイクアウトの報告が無いのが気になるところである。

B 5判 205ページ カラー10ページ 表紙と裏表紙に朝日に輝くI峰とII峰のカラー写真

〒527 八日市市上之町1-25 八日市高校内
滋賀県高体連登山部

さわやかに山へ

田部井淳子 著

「岳人」に掲載された文章を中心にまとめられた写真主体の本。ヒマラヤ関係は、ネパールのトレッキングを主として14ページ割かれている。

A 5判 111ページ 東京新聞出版局刊

1500円+税 尚、この本の印税は一部は、H A T-Jに寄付すると記されている。

30周年資金協力者ご芳名

7口(稲田定重) 3口(西郡光昭、高田幸子、平田清志、岩水竜峰) 2口(森美枝子、国沢鎮雄、斎藤惇生) 1.2口(柳沢剛男) 1口(山本幸生、鈴木正典、渡部清治、戸部秀男、植木知司、高羽秀徳、木下祥子、笹原芳樹、村上武、伊藤清春、利部輝雄、鮫川太一) 0.5口(鳥井修一)

1997年 6月20日現在 総計58名 1,187,000円

東京集会のお知らせ

日時 7月28日(月)午後7時～
内容 暑気払いです。(ネパール新地図を見ながら冷たいビールを。)
場所 H A J ルーム(地下鉄有楽町線東池袋下車4番出口から地上に出て右へ徒歩2分)
又は、J R 大塚駅下車、都電荒川線の早稲田方面2つ目の東池袋4丁目下車、前方で右に折れて地下鉄出口から徒歩2分)

平成9年度

日本ヒマラヤ協会通常総会報告

日時 平成9年5月31日(土)

13時10分～14時15分

会場 東京、池袋、かんぼヘルスプラザ東京

出席者 本人出席：柴田金之助(顧問)、稲田定重、山森欣一、寺沢玲子、中川裕、大内倫文、古関正雄(以上理事)、中岡久(監事)、鈴木正典(山形)、飛田和夫(埼玉)、鈴木雄一、森山安次、山崎幸二、(以上東京)、安部博(神奈川)

定足数 以上本人出席14名、委任状提出者268名。
の確認 合計282名。

定款第25条の規定により会員現在数の3分の1以上の出席により成立。現在の会員総数は784名で定足数は262名。よって総会は成立。

総会次第

1) 開会

寺沢常務理事の司会で定刻より10分遅れて開会。定款の定めるところにより、議長には稲田理事長があたり、議事録署名人に飛田和夫、森山安次両会員を選んで議事に入った。

2) 議事

議案各号について山森専務理事より説明がなされ質疑に入った。

第一号議案 平成8年度事業報告について

第二号議案 平成8年度収支決算及び財産目録の報告について

収支決算報告に伴い中岡監事から監査報告が行われ、適正な収支報告である旨述べられた。

以上若干の質疑の後、別紙報告の両議案とも異議なく承認された。

第三号議案 平成9年度事業計画について

第四号議案 平成9年度収支予算について

以上、別紙報告の両議案とも異議なく承認された。

第五号議案 会員の除名について

定款第8条の規定に従って、再三の督促にも

かかわらず会費未納の36名が、除名対象者として提案され承認された。尚、この除名規定は現実に合わないことから次年度に見直すこととなった。

その他、

理事会報告が、山森専務理事から報告された。また、30周年記念行事についての協力要請が行われ、事務局運営の実態についても紹介があり、各会員の絶大なる支援の要請があった。

以上をもってすべての議案審議を終え、平成9年度の通常総会は終了した。

平成8年度事業報告

自 平成8年4月1日

至 平成9年3月31日

I. 定款第4条第1項にもとづく事業(ヒマラヤに関する総合的な資料と情報の収集・整理・保存及び、それらの利用希望者に対する便宜供与)

1. 情報管理事業

1) 会員内外に対する情報提供とトレッキング・踏査・登山計画の企画・研究等の指導。

年間300件を越す電話による問い合わせと50件を越える事務所への来訪者へ情報提供と指導を実施した。報道各社の照会が増加した。

2) 文献・資料のレファレンスサービス

一般的に入手しづらいものに限定してサービスを実施した。ヒマラヤ諸国の登山規則・地図・登山記録・登頂者記録等に関する希望者が多い。

2. 日本ヒマラヤ研究所設置事業

情報管理態勢について各団体との連携について検討した。

II. 定款第4条第2項にもとづく事業(登山をはじめとする野外活動と関連する諸分野に関する研究活動と成果の公表)

1. 調査研究事業

1) 高所登山における事故防止に関する調査研究

続発する高所登山の事故を分析し、事故防止のために研究成果を「インド・ヒマラヤ会議」、「中国登山研究会」、「事故と環境対策研修会」を通して発表した。又、ヒマラヤにおける日本隊の死亡事故は、1968年から29年間連続して発生し、96年5月にはエヴェレストの南北で大量遭難とトラブルが発生し、一般の関心も高まり、各報道機関から照会が相次いだ。

2) 高所登山に対する意識調査

機関誌「ヒマラヤ」300号特集として、全国のヒマラヤニストを対象に「現代のヒマラヤ志向とは」と題する意識調査を行い、好評を博した。

3) 山岳の自然環境を汚染しないで実施する登山・踏査活動の研究

各国の実践例について収集した。

2. 出版事業（研究・報告）

1) ミニヤ・コンカ（4月）

八千メートル峰への挑戦（2月）

2) 各登山隊報告書の発行準備

3) 「ヒマラヤ」英文ダイジェスト版の発行準備

3. 関連学術事業

興味ある地域について調査した。

Ⅲ. 定款第4条第3項にもとづく事業（ヒマラヤへの登山をはじめとする野外活動・研究・調査等の団体の派遣）

1. 高所登山事業

1) サマー・キャンプ「ムスタグ・アタ(7,546m)」登山隊の派遣

7月20日～8月25日に中川裕隊長以下6名を派遣し、8月13日と17日に5名が頂した。

2) 日中合同クーラ・カンリⅡ(7,418m)登山隊の派遣

3月25日～5月23日に山森欣一隊長以下7名を派遣し、チベット登山協会と合同にて挑んだが、6,350mで断念した。尚、当初の目的はヤンラ・カンリ(7,429m)であっ

たが、9月25日～10月11日に偵察隊として山森欣一を派遣したが、主にアプローチの問題から、チベット側と協議した結果クーラ・カンリⅡへと転進した。

3) 直轄プロジェクトの推進

イ) 平成10年度サマー・キャンプ「ヌン(7,123m)登山」

夏の登山実施に向けて本格的に隊員を募集中。

ロ) 平成9年度「女性ムスタグ・アタ(7,546m)登山」

夏の登山実施に向けて本格的に隊を構成（市川春代隊長以下6名）した。

ハ) 平成10年度サマー・キャンプ「ユイチュ(6,179m)登山」

夏の登山実施に向けて本格的に隊員を募集中。

ニ) 平成9年度サマー・キャンプ「ニンチン・カンサ(7,206m)登山」

夏の登山実施に向けて本格的に隊を構成（天城敏彦隊長以下13名）した。

4) 登山許可申請と取得

魅力あるヒマラヤの高峰について、各国に対して前年に引き続き許可申請を行った。

2. 野外活動事業

1) ヒマラヤ各国の魅力ある地域への踏査、トレッキング隊の派遣について企画準備を行った。

Ⅳ. 定款第4条第4項に基づく事業（機関誌、その他の刊行物、登山・野外活動、研修・各種の会合によるこの分野の健全な発達を図るための指導・啓蒙活動）

1. 機関誌発行事業

「ヒマラヤ」293号～304号を毎月発行した。（毎号24～28ページ）

2. 出版事業

1) 「中国登山の手引き・第4版」（5月）

2) 「ヒマラヤ教本」の発行準備を行った。

3. 指導・啓蒙事業

1) 日本ヒマラヤ会議の開催

各地の条件が整わず開催出来なかった。

2) 地域ヒマラヤ集会の開催

各地の条件が整わず開催できなかった。

3) 定例会集

東京で毎月開催した。

4) 第18回「インド・ヒマラヤ会議」の開催

1月12日東京にて開催。平成8年度隊の報告と情報交換を行った。参加者36名。

5) 第5回「中国登山研究会」の開催

1月19日東京にて開催。平成8年度隊の報告と情報交換を行った。参加者35名。

6) 第3回「高所登山 事故と環境対策研修会」開催

4月7日東京にて開催。雪崩などの遭難事故防止とテイクイン、テイクアウトについて研修した。参加者40名。

7) 第4回「高所登山 事故と環境対策研修会」の開催

3月23日東京にて開催。上記に同じ。参加者32名。

8) 壮行会

計画発表と情報の伝達。ムスターグ・アタ(7月)、クーラ・カンリⅡ(3月)

V. 定款第4条第5項にもとづく事業(その他、前条の目的を達成するために必要と認める事業)

1. 国際交流事業

1) 外国代表の招請

特に実施しなかった。

2) 代表の派遣

イ) 韓国、釜山で開催された「第二回日韓岳人シンポジウム」に山森専務理事を派遣した。(5月30日～6月1日)

ロ) ヤンラ・カンリ議定のため山森専務理事をチベット登山協会へ派遣。(ニンチン・カンサの偵察を兼ねる。(8月24日～9月4日))

3) 各ヒマラヤ諸国の関係者との交流

イ) ネパール山岳協会パル・テンバ氏と博物館の件について懇談(6月)

ロ) UIAA会長ディヴィス氏歓迎会(11月)

ハ) チベット登山協会秘書長、高謀興氏と懇談(11月)

ニ) 中国登山協会代表团(ローサン・ダウ

団長以下7名)歓迎会(11月)

ホ) ネパール、ペンバ・ツェリン氏歓迎会(2月)

ヘ) 中国登山協会代表团(曾曙生主席)歓迎会(2月)

2. 国内関係団体との協調

1) 日本ヒマラヤン・アドベンチャー・トラスト(HAT-J)と協調して、ヒマラヤの環境保護啓蒙活動を実施した。

2) 日山協、JAC、労山と協調して「プラスチック製登山靴突然破壊問題」について継続して協議を行い、4月にシンポジウムを開催した。

3) 大阪府山岳連盟と韓国山岳連盟主催による「第二回日韓岳人シンポジウム」に山森専務理事が出席し、テイクイン、テイクアウトについて講演した。

4) 日山協を窓口とするネパール、ポカラに建設予定の「国際山岳博物館」に対する協力について協議した。

5) その他、日山協、労山、JAC情報管理について意見交換を行った。

3. 組織の整備

専従一人態勢となり、会員事務、機関誌発行事務にほとんどの時間がさかれ、これまでのような、情報収集・整理、将来展望などに充てる時間がとれなくなった。

4. 遭難事故の処理

1994年9月に遭難したミニヤ・コンカ登山隊の事故処理を行った。

- 1) 4月17日つくば市で鈴木洋介隊員の葬儀。
- 2) 4月に「ミニヤ・コンカ 登山と遭難の記録」を発刊し家族に贈呈した。

5. 30周年記念

常務理事を中心に協議を行い、1998年1月25日に記念式典と祝賀会、写真展を行う。また、4点の出版を行うことを決定。これに伴う資金協力を会員にお願いすることなどを決定した。

平成8年度収支決算書

自 平成8年4月1日
至 平成9年3月31日

I. 一般会計

(収入の部)

(単位：円)

勘定科目		予算額	決算額	増・減(△)
大科目	中科目			
入会金収入		(500,000)	(375,000)	(△ 125,000)
	入会金収入	500,000	375,000	△ 125,000
会費収入		(9,000,000)	(8,512,300)	(△ 487,700)
	通常会員会費	6,000,000	5,862,300	△ 137,700
	終身会員会費	3,000,000	2,650,000	350,000
事業収入		(14,500,000)	(17,833,229)	(3,333,229)
	野外活動事業	0	0	0
	高所登山事業	12,800,000	14,816,121	2,016,121
	指導啓蒙事業	200,000	306,000	106,000
	機関誌発行事業	800,000	347,148	△ 452,852
	出版事業	500,000	2,363,960	1,863,960
	国際交流事業	200,000	0	△ 200,000
	その他事業	0	0	0
雑収入		(202,000)	(376,177)	(174,177)
	受取利息収入	2,000	13,998	11,998
	その他雑収入	200,000	362,179	162,179
特別収入		(0)	(939,000)	(939,000)
	財政支援金収入	0	939,000	939,000
前期繰越		(△ 7,098,039)	(△ 7,098,039)	(0)
	前期繰越	△ 7,098,039	△ 7,098,039	0
合計		17,103,961	20,937,667	3,833,706

(支出の部)

(単位：円)

勘定科目		予算額	決算額	増・減(△)
大科目	中科目			
管理費		(8,820,000)	(8,311,362)	(△ 508,638)
	給料手当	5,000,000	5,000,000	0
	旅費交通費	0	0	0
	通信運搬費	400,000	368,620	△ 31,380
	電話費	300,000	294,125	△ 5,875
	消耗品・文具費	100,000	16,072	△ 83,928
	宮繕備品費	0	0	0
	印刷製本費	700,000	396,202	△ 303,798
	図書費	50,000	60,250	10,250
	貸借料	1,800,000	1,709,000	△ 91,000
	光熱水費	150,000	159,726	9,726
	会議費	20,000	27,192	7,192
	広報費	200,000	231,956	31,956
	雑費	100,000	48,219	△ 51,781
事業費		(14,850,000)	(16,731,220)	(1,881,220)
	野外活動事業	0	0	0
	高所登山事業	11,000,000	12,160,402	1,160,402
	指導啓蒙事業	150,000	261,149	111,149
	機関誌発行事業	3,000,000	2,988,717	△ 11,283
	出版事業	500,000	1,138,434	638,434
	国際交流事業	200,000	182,518	△ 17,482
	その他事業	0	0	0
特別支出		(2,000,000)	(1,882,716)	(△ 117,284)
	事故処理費	2,000,000	1,882,716	117,284
次期繰越		(△ 8,566,039)	(△ 5,987,631)	(2,578,408)
合計		17,103,961	20,937,667	3,833,706

II. 財産目録

(平成9年3月31日現在、単位：円)

種別	摘要	金額
1. 現金		(79,325)
	手許現金	79,325
2. 普通預金		(4,193,539)
	東京三菱銀行新宿支店No4455421	98,580
	第一勧業銀行高田馬場支店No1099791	3,920,759
	住友信託銀行新宿支店No5136696	152,633
	東京三菱銀行新宿中央支店No558060	21,567
3. 郵便振替		(457,387)
	0 0 1 0 0 - 6 - 4 8 9 5 4	457,387
4. 金銭信託		(2,964,006)
	住友信託銀行新宿支店	2,964,006
	157,538 (1,412,286)	
	167,188 (1,551,720)	
5. 未収金		(120,000)
	終身会員申込者未収金	120,000
6. 備品		(200,000)
	事務所備品	200,000
7. 登山装備		(1,000,000)
	中国・デポ	800,000
	インド・デポ	200,000
資産合計		9,014,257
8. 未払金		(800,000)
	柴田金之助	100,000
	1992年クラウン峰隊	700,000
10. 預り金		(118,000)
	新入会者 8名	118,000
11. 前受金		(2,933,888)
	1997年登山隊分	2,933,888
12. 借入金		(11,150,000)
	柴田金之助	2,000,000
	遠藤登	150,000
	植松秀之	600,000
	小島守夫	500,000
	渡辺斉	300,000
	住友信託銀行新宿支店	2,600,000
	稲田定重扱い	5,000,000
負債合計		15,001,888
差引正味財産		△ 5,987,631

貸借対照表

(平成9年3月31日現在、単位：円)

借方		貸方	
科目	金額(円)	科目	金額(円)
現金	79,325	未払金	800,000
普通預金	4,193,539	預り金	118,000
郵便振替	457,387	前受金	2,933,888
金銭信託	2,964,006	借入金	11,150,000
未収金	120,000	次期繰越欠損金	△ 5,987,631
備品	200,000		
登山装備	1,000,000		
合計	9,014,257	合計	9,014,257

平成9年度事業計画書

自 平成9年4月1日

至 平成10年3月31日

I. 定款第4条第1項にもとづく事業（ヒマラヤに関する総合的な資料と情報の収集・整理・保存及び、それらの利用希望者に対する便宜供与）

1. 情報管理事業

1) 会員内外に対する情報提供と踏査・登山計画の企画・研究等の指導。

2) 文献・資料のレファレンスサービス
一般的に入手しづらいものに限定してサービスを実施する。

2. 日本ヒマラヤ研究所設置事業

21世紀を展望し、日本の各団体の協調による情報管理機構の設立を模索し、それと関連して、重複しない分野を見定めて検討する。

II. 定款第4条第2項にもとづく事業（登山をはじめとする野外活動と関連する諸分野に関する研究活動と成果の公表）

1. 調査研究事業

1) 高所登山における事故防止に関する調査研究

2) 高所登山に対する意識調査

3) 山岳の自然環境を汚染しないで実施する登山・踏査活動の研究

2. 出版事業（研究・報告）

1) 「日中合同登山隊報告書」の発行（1月）

3. 関連学術事業

興味ある地域への派遣準備

III. 定款第4条第3項にもとづく事業（ヒマラヤへの登山をはじめとする野外活動・研究・調査等の団体の派遣）

1. 高所登山事業

1) サマー・キャンプ「ニンチン・カンサ（7,206m）登山隊の派遣

2) 「女性ムスターグ・アタ（7,546m）」登山隊の派遣

3) 直轄プロジェクトの推進

イ) 平成10年度サマー・キャンプ「ヌン（7,135m）登山」

夏の登山実施に向けて隊を構成する。

ロ) 平成10年度「ユイチュ（6,179m）登山」

夏の登山実施に向けて隊を構成する。

ハ) 平成10年度サマー・キャンプ「ニンチン・カンサ（7,206m）登山」

夏の登山に向けて隊を構成する。

ニ) 平成10年度「カバン（6,717m）登山」

秋の登山実施に向けて隊を構成する。

4) 登山計画の策定と許可申請及び取得

我国の昨今の高所登山分野での現状を分析しつつ、登山の大衆化の分野の声に應えると共に、一方の柱となる未知と困難への挑戦の分野の育成を念頭においた魅力あるヒマラヤの高峰について、企画立案を行いそれぞれの国に対して前年に引き続き登山許可申請を行いこれの取得を行う。

2. 野外活動事業

1) 会員の要望を調査し、ヒマラヤ各国の魅力ある地域踏査隊の派遣を企画立案する。

IV. 定款第4条第4項に基づく事業（機関誌、その他の刊行物、登山・野外活動、研修・各種の会合によるこの分野の健全な発達を図るための指導・啓蒙活動）

1. 機関誌発行事業

「ヒマラヤ」305～316号を毎月発行する。
（毎号24～28ページ）

2. 出版事業

1) 「30周年記念」として ★H A J30年間の行動記録 ★ヒマラヤ登山日本隊のまとめ ★ヒマラヤ登山日本隊遭難事故事例集 ★機関誌「ヒマラヤ」総索引を発行（1月）

2) ネパール登山の手引き（3月）

3) 「ヒマラヤ教本」の発行準備

3. 指導・啓蒙事業

1) 日本ヒマラヤ会議の開催

各理事・評議員と協議し、条件が整い次第随時開催する。

2) 地域集会・定例集会の開催

東京（毎月）、各地域評議員と協議して随時開催する。

3) 第19回「インド・ヒマラヤ会議」の開催
平成9年度隊報告と、10年度計画隊の情報交換。

- 4) 第5回「高所登山 事故と環境対策研修会」の開催準備
- 5) 第6回「中国登山研究会」の開催
- 6) 公式報告会
東京にて実施する。
- 7) 家族会と壮行会
各登山隊について実施する。
- V. 定款第4条第5項にもとづく事業（その他、前条の目的を達成するために必要と認める事業）
1. 国際交流事業
- 1) 外国代表の招請
渉外上必要と認められる代表について慎重に検討し随時招請する。
- 2) 代表の派遣
- イ) ニンチン・カンサ隊の渉外として、登山隊と同時に山森専務理事を派遣する。
(7月20日～7月26日)
- ロ) カシュガルのデポ品整理を兼ねて女性ムスターグ・アタ隊の下山時に山森専務理事を派遣する(8月17日～8月27日)
- 3) 各ヒマラヤ諸国の関係者との交流
来日したヒマラヤ諸国の登山関係者や在日大使館、その他の国の登山者と随時懇談する。
2. 国内関係団体との協調
- イ) 日山協、労山、日本山岳会、各岳連、HAT-J、日本登山医学学会その他関係諸団体と随時事業提携・協力・情報交換を行う。
- ロ) ヒマラヤ登山情報管理、山岳共催、雪崩などの分野について、既存の団体の存在意義を尊重しつつ、登山者が一致団結してスケール・メリットを生かし、登山者のために役立つような機構の設立に協力する。
3. 組織の整備
- 1) 常務理事を中心とした事業分担制の検討。
- 2) 事務局支援態勢の確立。
- 3) 財政強化の対策。
終身会員への移行の推進。
- 4) 新規会員拡大の強化。
4. 30周年記念事業
- 1) 記念式典、祝賀会、写真展の開催。
1998年1月25日に実施。
- * 記念式典(科学技術館・ホール)
午前：日本人ヒマラヤニストによるパネルディスカッション(今後のヒマラヤ登山の留意点)
午後：ネパール、中国、インド、パキスタン代表による講演(ヒマラヤ登山の現状と問題点)
- * 祝賀会(夜間：九段会館)
- 2) 野外活動の実施。
ヒマラヤ諸国で開催される諸行事と連動して随時派遣する。
- 3) 記念誌の発行。
前掲のとおり。

平成9年度役員等名簿

(任期は平成10年度まで)

- [顧問] 古原和美(長野) 柴田金之助(岐阜)
- [会長] 遠藤登(東京)
- [副会長] 関東在住会員から適任者を常務理事会にて交渉して決定する。
- [理事] 17名。理事長・稲田定重(福島) 専務理事・山森欣一(東京) 常務理事・八木原 罔明(群馬) 尾形好雄(東京) 寺沢玲子(埼玉) 中川裕(東京) 野沢井歩(神奈川) 以上常務理事会構成メンバー
理事・大内論文(北海道) 八嶋寛(宮城) 植松秀之(山形) 名塚秀二(群馬) 酒井 國光(茨城) 古関正雄(神奈川) 田辺治(愛知) 林雅樹(京都) 南勲(大阪) 名越寛(広島)
- [監事] 保坂昭憲(福島) 中岡久(埼玉)
- [評議員] 18名。阿部淳・辻野治子(北海道) 松館正義(青森) 丸山芳雄(秋田) 那須宗一・菅原和明(山形) 小島守夫(栃木) 渡辺斉(埼玉) 鈴木雄一・坂上利明・橋本康弘(東京) 上原昭則(山梨) 西嶋鍊太郎(石川) 中村正勝(長野) 大西保(大阪) 今村裕隆(山口) 国沢 鎮雄(高知) 下田泰義(長崎)

平成9年度収支予算書

自 平成9年4月1日
至 平成10年3月31日

都道府県別会員数

(平成9年5月21日現在・除名後)

I. 一般会計

(収入の部)

(単位:円)

勘定科目		予算額	前年度予算額	増・減(△)
大科目	中科目			
入会金収入		(500,000)	(500,000)	(0)
	入会金収入	500,000	500,000	0
会費収入		(9,000,000)	(9,000,000)	(0)
	通常会員会費	6,000,000	6,000,000	0
	終身会員会費	3,000,000	3,000,000	0
事業収入		(16,700,000)	(14,500,000)	(2,200,000)
	野外活動事業	0	0	0
	高所登山事業	15,000,000	12,800,000	2,200,000
	指導啓蒙事業	200,000	200,000	0
	機関誌発行事業	800,000	800,000	0
	出版事業	500,000	500,000	0
	国際交流事業	200,000	200,000	0
	その他事業	0	0	0
雑収入		(502,000)	(202,000)	(300,000)
	受取利息収入	2,000	2,000	0
	その他雑収入	500,000	200,000	300,000
特別収入		(5,000,000)	(0)	(5,000,000)
	30周年記念	5,000,000	0	5,000,000
前期繰越		(△ 5,987,631)	(△ 7,098,039)	(1,110,408)
	前期繰越	△ 5,987,631	△ 7,098,039	1,110,408
合計		25,714,369	17,103,961	8,610,408

(支出の部)

(単位:円)

勘定科目		予算額	前年度予算額	増・減(△)
大科目	中科目			
管理費		(8,820,000)	(8,820,000)	(0)
	給料手当	5,000,000	5,000,000	0
	旅費交通費	0	0	0
	通信運搬費	400,000	400,000	0
	電話費	300,000	300,000	0
	消耗品文具費	100,000	100,000	0
	営繕備品費	0	0	0
	印刷製本費	700,000	700,000	0
	図書費	50,000	50,000	0
	貸借料	1,800,000	1,800,000	0
	光熱水費	150,000	150,000	0
	会議費	200,000	200,000	0
	広報費	200,000	200,000	0
	雑費	100,000	100,000	0
事業費		(16,950,000)	(16,850,000)	(100,000)
	野外活動事業	0	0	0
	高所登山事業	13,000,000	11,000,000	2,000,000
	指導啓蒙事業	150,000	150,000	100,000
	機関誌発行事業	3,000,000	3,000,000	0
	出版事業	500,000	500,000	0
	国際交流事業	200,000	200,000	0
	事故処理費	0	2,000,000	△ 2,000,000
特別支出		(5,000,000)	(0)	(5,000,000)
	30周年記念	5,000,000	0	5,000,000
次期繰越		(△ 5,055,631)	(△ 8,566,039)	(3,510,408)
	次期繰越	△ 5,055,631	△ 8,566,039	3,510,408
合計		25,714,369	17,103,961	8,610,408

北海道	61(3)[14]	61	三重	7	49
青森	8(1)		和歌山	4	
秋田	10		奈良	2	
岩手	6(1)[1]		滋賀	8	[1]
宮城	17(2)[1]		京都	15(2)	[1]
山形	25(4)		大阪	22(1)	[1]
福島	28(6)[4]	94	兵庫	23(1)	[1]
栃木	18(2)[2]		岡山	2	
群馬	39(13)[7]		広島	11(5)	[2]
茨城	16(2)		鳥取	3	[1]
埼玉	43(11)[7]		島根	1	
千葉	26(6)[3]		山口	4(1)	[1]
神奈川	62(12)[10]	203	香川	4(1)	
東京	165(27)[22]	165	愛媛	2(2)	
山梨	9		徳島	0	
新潟	5		高知	5(1)	32
富山	7(1)[1]		福岡	28(2)	
石川	12(2)[1]		佐賀	3(1)	
福井	4		大分	4	
長野	22(4)	59	長崎	8(1)	
静岡	8	[1]	熊本	2	
愛知	27(2)[4]		宮崎	2	
岐阜	7(2)[1]		鹿児島	0	
国外会員	13		沖縄	0	47
			総数	784(112)	[87]

* ()内は終身会員数 []内は女性数

* 総数784名(内、夫婦会員32組)その他に外国会員13名。

ニンチン・カンサ登山隊員募集

ラサから半日行程の所にヤマドク・ツォと呼ばれる大きくて美しい湖があります。その湖を見下ろすようにそびえているのが名峰ニンチン・カンサ(7,206m)です。

記

1. 期間:1998年7月19日~8月25日(38日間)
2. 募集人員:10名程度
3. 負担金:80万円
4. 申し込み:HAJ事務局まで

■ 寸 感 ■

クーラ・カンリのBCは、東西にのびる谷間にある。11年前の同時期I峰の初登頂に成功した神戸大学の報告書には「上空の西風がこの谷を吹き抜けて、定常的な強風に悩まされた」と記述されている。

今回、私達のBCは同じ谷の10kmほど東ではあるが、「東」の強風に悩まされた。いい加減にしる／と叫びたくなるほど連日吹きまくった。帰国してから、日本は実に静かである、と感じる。

ヒマラヤの自然は、確実に変わっている。特に気象的な面では、10～15年ほど前の報告を鵜呑みには出来ないと思う。(山森)

事務局日誌 (6月)

- 2日(月) ニンチン・カンサ隊家族会通知発送
- 3日(火) 合同壮行会案内状発送
- 4日(水) CMAへ今夏派遣2隊の書類提出
- 5日(木) 98年玉珠峰資料作成
- 7日～8日 第17回登山医学シンポジウム(東京、

山森、八木原)

- 9日(月) ヒマラヤ308号発送
CMAへ2隊分送金
- 10日(火) ニンチン・カンサ隊協議(山森、天城)
- 12日(木) 98年ニンチン・カンサ資料作成
- 14日～15日 日山協海外遭難対策研究会(福岡、山森)
- 30日(月) 東京集会(17名)

ヒマラヤ No.309 (8月号)

平成9年7月10日印刷 9年8月1日発行

発行人 稲田 定重

編集人 山森 欣一

発行所 日本ヒマラヤ協会

〒170 東京都豊島区東池袋4-2-7

萬栄ビル501号

電話 03-3988-8474

郵便振替 00100-6-48954「日本ヒマラヤ協会」



ガモフバッグとパルスオキシメーターのレンタル開始!

加圧しただけで約2000m下山したのと同じ環境を作るガモフバッグ、高山病診断、予防のためのパルスオキシメーター。高所を目指すあなたをそろって力強くサポートします。

- ガモフバッグ(携帯用高压バッグ/総重量6.7kg)
- パルスオキシメーター
(血中酸素飽和度測定装置/重量380g/単3乾電池4本使用/携帯型)

総代理店 : 日本メディコ株式会社

レンタル・販売問い合わせ先 : 株式会社 ティ・エッチ・アイ

〒135 東京都江東区木場2-5-7 KHビル7階

TEL : 03-5245-0511 FAX : 03-5245-0510

(隊荷の輸送、航空券の手配などもお任せください。)

TREASURE TOUR



EXPEDITION & TREKKING

自分の旅だから、自分でつくる。そんなあなたを応援いたします。

—— 遠征隊、トレッキング、秘境への旅 ——

あらゆる申請・許可取得、現地手配、航空券、山岳保険など、
お客様のご要望に遠征経験豊富なスタッフがお答えします。



マウンテンラベル株式会社

〒105 東京都港区新橋3-26-3 会計ビル4F

☎03-3574-8880

三井航空サービス代理店2452号

遙かなる高みへ



個人・グループの手配旅行、航空券の取り扱い専門デスク



キャラバンデスク TEL03-3237-8384

～地球の果てまであなたのキャラバンのお手伝い～

トレッキング・登山隊の許可取得から航空券・現地手配までお引き受けいたします。
～ネパール・インド・ブータン・パキスタン・東南アジア・アフリカ・南米～

トレッキング・海外登山
シルクロード・秘境旅行
のバイオンア



株式会社 西遊旅行

東京本社 〒101 東京都千代田区神田神保町2-3-1岩波書店アネックス5階 ☎03(3237)1391(代表)

キャラバンデスク 〒101 東京都千代田区神田神保町2-3-1岩波書店アネックス5階 ☎03(3237)8384(代表)

大阪営業所 〒530 大阪市北区神山町6-4 北川ビル5F ☎06(367)1391(代表)

カトマンズ営業所 JAI HIMAL TREKKING(P) Ltd. P.O. BOX3017 KATHMANDU, NEPAL ☎221707

運輸大臣登録一般旅行業607号

ヒマラヤへの装備

●遠征隊の装備、相談にのります。



Mt. EXPEDITION SHOP ICI ISHII SPORTS

- 登山本店 / 〒169 東京都新宿区百人町2-2-3 ☎03(3208)6601代
- スキー&カヌー本店 / 〒169 東京都新宿区大久保2-18-10 ☎03(3209)5547代
- 新宿西口店 / 〒160 東京都新宿区西新宿1-16-7 ☎03(3346)0301代
- 新宿南口店 / 〒151 東京都渋谷区代々木1-58-4 ☎03(5350)0561
- 神田登山店 / 〒101 東京都千代田区神田神保町1-8 ☎03(3295)0622
- 神田店 / 〒101 東京都千代田区神田神保町1-4 ☎03(3295)3215
- 神田ウェア館 / 〒101 東京都千代田区神田神保町1-6-1 ☎03(3295)6060
- 八王子店 / 〒192 東京都八王子市横山町3-12 ☎0426(46)5211
- アネックス八王子店 / 〒192 東京都八王子市横山町3-6 ☎0426(46)3922
- 川越店 / 〒350 埼玉県川越市南通町14番4 ☎0492(26)6751
- 大宮店 / 〒330 埼玉県大宮市宮町2-123 ☎048(641)5707
- 高崎店 / 〒370 群馬県高崎市新町5-3 ☎0273(27)2397
- 松本店 / 〒390 長野県松本市中央2-4-3 ☎0263(36)3039
- 新潟店 / 〒950 新潟県新潟市東大通2-5-1 ☎025(243)6330

- 新潟ブランク店 / 〒950 新潟県新潟市天神1-1ブランク3 B1 ☎025(240)2316
- 仙台店 / 〒980 宮城県仙台市宮城野区榴岡4-1-8 ☎022(297)2442
- 盛岡大通店 / 〒020 岩手県盛岡市大通1-10-16 ☎0196(26)2122
- 札幌店 / 〒060 札幌市中央区南二条西4-8 ☎011(222)3535
- ルート36真栄店 / 〒004 札幌市豊平区真栄一条2-13-2 ☎011(883)4477
- 北十二条店 / 〒001 札幌市北区北十二条西3-5 ☎011(747)3062
- 2番街店 / 〒060 札幌市中央区南二条西1-5 ☎011(219)1413
- 旭川店 / 〒070 旭川市六条通8-37-2 ☎0166(24)5300
- 外商部(メールオーダー) / 〒169 東京都新宿区百人町2-2-3 ☎03(3200)7219



ICI 石井スポーツ

事務所 / 〒169 東京都新宿区百人町1-4-15 ☎03-3200-1004